

美濃陶磁歴史館だより



連続

うちんたあのお宝、なんやね？

コラム

第6回 駄知線と製陶関係者悲願の鉄道

駄知駅と土岐市駅の間約10kmを結んだ駄知線。通勤通学に利用した思い出をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。

駄知線の開業は大正11(1922)年のことです。当時、陶磁器産業の成長著しい駄知町において、鉄道による美濃焼輸送は関係者の悲願でした。駄知線は町民の熱意と努力の末、構想から10年以上の年月をかけて開業に至りました。

その始まりは明治27(1894)年まで遡ります。その頃、中央線敷設計画が持ち上がり、名古屋から瀬戸、笠原、下石、駄知を通り大井に至るルートへの誘致運動の中心となったのが駄知の籠橋休兵衛でした。休兵衛は中国向けに「赤井」を開発したほか、銀行や電力会社を設立し町の発展に貢献した人物です。駄知を通る中央線誘致はかなわず、中央線は明治44(1911)年に現ルートで全線開業となったため、

この年、駄知と中央線の駅とを結ぶ私設鉄道の計画が動き始めました。

当時71歳だった休兵衛は計画の顔役となり、実務は娘婿の留次郎が担いました。当初ルートを駄知から瑞浪駅で計画するものの挫折、最終的に下石經由土岐津へ至るルートに決まりました。莫大な工費調達のため、留次郎らは北海道から九州まで美濃焼の取引先を回り株式購入を呼び掛け、大正8(1919)年に駄知鉄道株式会社が発足、初代社長に留次郎が就任しました。第一期工事は土岐津―下石間、次いで山神まで、最後の駄知まではトンネルを掘り抜く難工事でした。

駄知線は大正11年1月から工事を終えた順に開業、翌年1月に全線開業となり、以後、美濃焼輸送に活躍しました。戦後は通勤通学の足として親しまれましたが、昭和47(1972)年の豪雨により土岐川鉄橋が流され運休、同49年に廃線となったのです。



現在の日帰山^{すいどう}隧道



山神駅近くの鉄橋跡



駄知線の機関車 撮影年不明(戦前か)

企画展 のご案内

現代茶陶展のあゆみ 現代茶陶とはなにか 「それぞれのこたえ」

2021年、コロナ禍において開催が延期された現代茶陶展は、現代の茶の湯のための器を全国あるいは海外から広く募集する土岐市主催の公募展です。本展では、延期された第14回の開催を待つ中、歴代の大賞作品を中心にこれまでのあゆみを振り返るとともに、現代の茶陶を再考する機会とします。

6/20(日)まで

同時開催 重要文化財公開「元屋敷陶器窯跡出土品展」

美濃陶磁歴史館
(☎ 051245)